巻頭言

# 「ともに場をつくる」経験の保障を

南出 吉祥（岐阜大学地域科学部准教授/協同総研理事）

「働く」＝自分を殺して会社の手足になること。

そんなイメージを強く抱いている若者は少なくない。それは、ただの幻想だとも言えず、多少なりとも実感を伴っている部分もある。毎日仕事に疲れて帰ってくる親の愚痴だったり、アルバイト先での労働や、社員の姿から実感している場合もある。就職活動の実情を見ても、まずは「仕事」があり、それを担う「人材」が募集され、その枠をめぐって「応募」する、というのが一般的な流れであり、必然的に「自分を仕事（会社）に合わせていく」という方向性となる。仕事や職場は「既にある」ものであり、そこに自分を当てはめていくことが、「働く」（就職する）ということだという認識はきわめて強固なものとして根付いている。それゆえ、就職活動においても、「そのままの自分を提示する」のではなく、「会社にとって有益であるような自分」を演出することが求められ、その人らしさを奪われていくということが常態化している。

一方、自分の個性や持ち味を活かしながら、活き活きと働いている人への憧憬は強いものの、それができるのはごく一握りのエリートに過ぎず、そこに自分を重ね合わせることは無理だと感じている。さらに仕事起こしや起業など、「仕事をつくる」という発想は、テレビやネットの世界の話でしかなく、自分とは縁のないものだと思っていることも多い。この間にある認識の隔たりを、どのように埋め合わせていけるのか。

◆

そんな「自分を殺す」就活に疲れ切っている若者たちに対し、農村女性の起業や失業者の仕事起こし、若者支援における地域起こし・仕事づくりなど、労働市場から排除された人びとが、周囲の他者とともに自分たちなりにできることを見出し、それを仕事にしていく活動もあるということを伝えていくと、目の色を変えて興味を示してくれることも多い。あるいは、「就労支援」につきまといがちな「雇われやすい人材にさせること」（個の育成）という既存のイメージに対し、働き口を創出したり創業したりといった「労働市場を拡張していく」（環境の是正）方向性もあることを示していくと、「目から鱗」という反応が返ってきたりもする。

そうした反応の背景には、「働く」ということの認識だけにとどまらず、「社会」そのものの認識がきわめて狭く捉えられていることが窺える。仕事と同様、「社会」もまず「ある」ものであり、ど

うやってそこに適応していくのかということが、「社会人になる」ということだという認識である。幼少期から学校教育を経ていくなかで、ひたすら「環境への適応」が求められ、そこからはみ出すことや異を唱えることは、自身がそこから排除されることへと結実していくという脅しがかけられ続ける。同時に、政治教育や主権者教育の範疇は狭隘で、人は生まれながらに主権者であり、子どもであっても「社会をつくる」一員であるという基本的前提すら学ぶ(経験する)機会を与えられず、「頑張って努力して主権者になりましょう」と追い立てられる。

◆

しかし、もう少し詳細に若者たちの生活実態を追っていけば、上記のような「追い立て」に振り回されているだけではない姿も見えてくる。サークル活動の運営や趣味の場であったり、休み時間や休日の過ごし方だったり、友人との遊びや旅行など、さまざまな場面で「みんなで決める」「場をつくる」といった自治・民主主義の実践が駆使されていることがわかる。しかし、それが公的な「労働」「生活」とは切り離され、私的な領域での営みとして不可視化されている状況にある。

だとすれば、問われてくるのは「私的な営み」の範疇で展開されてきた諸実践を、公的な領域での活動へといかに展開できるようにしていくか、という課題である(それは、家庭や地域で「無償の労働」として不可視化されてきた女性の労働を可視化し、相応の対価を伴った公的な労働へと発展させてきた諸実践・運動に倣う部分も少なくないだろう)。それは、不当に分断された公／私の区分を超えていくことであるとともに、個人の側から見れば、「生きること」と「働くこと」の間の溝を埋めていくことにつながる。

◆

たとえば若者支援の領域で取り組まれてきた仕事起こしの活動は、その前提として「居場所づくり」の活動・展開がある。「ともに場を過ごす」ために必要な所作や働きかけを、失敗や挫折も含めて試行的に学んでいくことが、「ともに働く」ことの基礎として機能している。「遊び」を通した仲間づくり・場づくりがあるのと同様、「学び」や「働く」ことを通した居場所づくり(＝コミュニティ形成)もあり、そうしたコミュニティ同士の相互連関が、全体としての「社会」を構成していく。誰もが自身の属するコミュニティの担い手であるとともに、全体社会の担い手でもあるということが、少しずつ実感できるようになっていく。

◆

この実感の獲得は、机上の議論や学習だけでは不可能であり、実体験を通して体得されていく。そのためには、狭義の「働く場づくり」だけでなく、教育の機会や遊び・文化活動なども含めて社会全体の課題として向き合っていく必要がある。そうした機会を地域ベースでどのように創出していけるのか、経済中心の社会が限界を迎え、閉塞感が増している今こそ、切実に問われている課題である。